

# アクチュアル・エンティティ

## の生態と矛盾

竹 田 浩 一

### 序

ホワイトヘッドの形而上学は、難解であり、様々のパラドックスに満ちているといわれて来た。だが、最近のワラックの研究<sup>(1)</sup>によって相当数のパラドックスが解消されたと思われる。ワラックは、ホワイトヘッド哲学における様々の対立的契機（現実と潜勢、原因と結果、主体と客体、連続と不連続等々）が調和していることを示した。しかしながら、それでもホワイトヘッド哲学はある矛盾を含んでいるように思える。以下において、ホワイトヘッド哲学の展開がある矛盾に到達することを示し（第一部）、さらにその理由を検討しそれによってホワイトヘッド哲学の再構成を試みてみたい（第二部）。

なお、紙数の関係で、アクチュアル・エンティティ（actual entity）やその他二三のものを除いて、ホワイトヘッド独特の用語の使用はできるだけ避け、一般的な用語を用いた。

### 第一部 生態

#### 非実体の哲学

ホワイトヘッドの形而上学は、自然哲学と呼ぶのがふさわしい。人間の全ての行為をも含み込んだ上での「自然」あるいは「宇宙」を説明する理論<sup>(2)</sup>が彼の形而上学である。この理論について、まず押えておくべきは、近代哲学のアンチテーゼとして提出されているということである。近代哲学の主流は、実体の哲学である。実体とは、「その存在のために自己自身以外のなにものも必要としない仕方 で存在するもの<sup>(3)</sup>」である。従って、ライブニッツの指摘のように<sup>(4)</sup>、実体間の関係・交流は、実在性を持たない。唯一実在的であるのは、実体・属性の関係である。ここから生じるのが、自足的実体の単なる集まりとしての世界であり、周知の二元論である。また、科学においては、物質が時空の中に「単に位置を占める（simple location）<sup>(5)</sup>」という考えとして現われているとホワイトヘッドはいう。すなわち、物質は時空と外的関係にあり、物質の占める領域は、他の領域と無関係に定まるとするのが「単に位置を占める」である。この時、物質は時空を同じ仕方 で占有するわけではない。時間の分割は物質に何の影響も与えないが、空間の分割はそうではない。こうして、時間の推移は、物質にとって無意味となり、世界は、「物質の瞬間的配列の継起<sup>(6)</sup>」と考えられるに至る。

以上のような実体の哲学とそれに基づく科学の立場が、実在に関するものとしては、もはや維持し難いものであると見てとり、それへのアンチテーゼとしてホワイトヘッドが提出したのが、アクチュアル・エンティティの哲学である。彼の哲学は、個々の実体的哲学への反論というより、「実体」の哲学へのアンチテーゼである。実体の世界は、静的で非発展的である。実体は、他の実体と何の関わりも持たず、自己同一性を保ち続ける。ホワイトヘッドの哲学は、これの端的なる否定である。彼の哲学では、実在は他との内的関係あるいは実在的关系によって存在する。世界は、この関係に基づいて発展して行

くのである。このように、彼の哲学では、関係を実在的なものとして認めるのである。

ここで、関係が実在的であるとは、次のような意味である。實在Aと實在Bの関係がなければ、AとBが、そのようなAとBとして存在していない時、関係は実在的である。まず實在としての規定を確立された関係項を立て、次にそれらの関係を考えるなら、関係は実在的とは呼べない。ホワイトヘッドにおいては、関係と関係項は同時に成立する。実在の関係が新しく成立することによって、関係項が新たに規定される。このことは、実体の哲学では不可能である。こうして、彼の哲学では、関係は既存のものから新たに生じる事態であり、「関係づけるという事実<sup>(7)</sup>」であって、この事態や事実がホワイトヘッドの實在である。従って、實在は、「有るもの」ではなく、「生成そのもの」である。アクチュアル・エンティティの哲学は、このような實在観に基づいている。

この哲学は、ホワイトヘッドの宇宙観から見て行くのが、解り易い。彼の宇宙は、様々の活動の相互作用の全体であり、様々の活動の充満体である。そして、これらの活動によって進化する宇宙である。この宇宙における実在的關係とは、実在的影響の授受である。アクチュアル・エンティティは、過去からの様々の影響を一つに関係づける活動である。宇宙はこのような活動の充満体であるから、アクチュアル・エンティティは、過去の多くのアクチュアル・エンティティからの影響を統一する活動である。このような活動が、次々と生起することが、宇宙の進展である。このような實在観は、ホワイトヘッド自身が認めているように、相対論や量子論の考察から得たものである<sup>(8)</sup>。

アクチュアル・エンティティは、進化する宇宙に見い出される種々の活動である。しかし、活動一般ではない。一つの規定を与えられ得る活動、すなわち現実態 (actuality) としての活動である。アクチュアルというのはこの意味で使われている。宇宙は、現在も進化を続けており、完了した活動ではない。それ故、過去・現在・未来の全てに渡る宇宙は、アクチュアル・エンティティではない。ホワイトヘッドは、現在のような様子の宇宙を、「我々の宇宙期<sup>(9)</sup>」と呼ぶ。我々の周りの全ての實在は、この宇宙期の進化の中で生じて来たものである。

「我々の宇宙期」は、電磁的なアクチュアル・エンティティの時期であるといわれる<sup>(10)</sup>。これは、例えば、電子的な一つの活動 (electric occasion) のことである。「電子」とは、このような活動の幾つかの連関 (nexus) であるといわれる<sup>(11)</sup>。一つのアクチュアル・エンティティは、多を統一する活動であった。連関とは、この統一に他ならない。この連関によって電磁的なアクチュアル・エンティティは組織化される。この組織化が、宇宙の進化であり、この中から、新しいタイプのアクチュアル・エンティティが次々と生じてきたといわれる。例えば、原子的な活動であり、細胞的な活動であり、生命としての活動である。こうして、一つの完了した活動と見做され得るものは全てアクチュアル・エンティティである。電子的活動も心臓の鼓動も猫がマタタビに喜ぶことも、カエサル的一生もローマ帝国<sup>(12)</sup>もアクチュアル・エンティティであるとされる。

ここで注意すべきは、電子や陽子が集って原子となるという風に原子論的に考えてはいけないということである。アクチュアル・エンティティは、関係づけるという活動である。宇宙における組織化とは、この関係づけに他ならない。原子的エンティティは、電磁的エンティティの集まりではなく、これらを下位レベルの活動として含む新たな統一活動である。アクチュアル・エンティティは、統一であり、システム化という活動である。その際下位システムは、上位システムの中において、この中に入らない場合とは異った性格を帯びるのである<sup>(13)</sup>。

## 現 実 態

アクチュアル・エンティティは、統一活動であり、統一の完了とともにこの活動は終わる。アクチュアル・エンティティは、生成し消滅するものであるといわれる<sup>(14)</sup>。この消滅とは、無に帰することではない。消滅とは、統一活動の終了である。過去のアクチュアル・エンティティの統一活動は、分散して、それ故もはや統一活動とはいえなくなって、多くの新しい統一活動の中に存在する。新しい統一とは、過去から来たものの現在における統一である。この過去から来たものは、実在的潜勢態 (real potentiality) と呼ばれる。現実態とは、統一活動の完了である。アクチュアル・エンティティは、実在的潜勢態から現実態へのプロセスであるとされる。それ故、時空的な幅を有する。

ホワイトヘッドの考えでは、潜勢態を実在的なものとして認めないならば、進展があり得ない<sup>(15)</sup>。実体は常に現実態である。それ故、進展はない。実在的潜勢態が現実態へと変容する所に新しさ、進展がある。この新しさとは、統一のもつ新しさである。プロセスとは過程というより進展なのである。

一度、現実態に達したアクチュアル・エンティティは、統一活動としては消滅して拡散される。そして次のプロセスの実在的潜勢態となる。後者のアクチュアル・エンティティも次のアクチュアル・エンティティの実在的潜勢態となる。このような連鎖において、アクチュアル・エンティティは、現実態に至った後は、次々と生じる新たなプロセスの実在的潜勢態の一部として存続するといわれる。どのように拡散したとしても、元の統一活動から由来する性格を残しているというのである。

実在的潜勢態は、純粋な潜勢態 (pure potentiality) と区別されねばならない。後者は、アクチュアル・エンティティの中に見い出される量や質を規定しているフォーム一般である。フォームは、様々のアクチュアル・エンティティに見い出されるかも知れない。しかしあるアクチュアル・エンティティの実在的潜勢態とは、当のエンティティに固有のものである。

プロセスは、現実態に達するまでは、実在的潜勢態である。それ故、プロセスの時空的な拡がりも、プロセスの完了までは、潜勢態として考えられる。これが、ホワイトヘッドの時空のエポーカル理論である。時間についていうと、ホワイトヘッドの時間の進行は、関係づけによって結ばれたプロセスの累積である。それ故、プロセスの完了までは、時間の進行は停止しているわけである<sup>(16)</sup>。

このことを、ホワイトヘッドが述べている事例<sup>(17)</sup>について、ワラックの分析<sup>(18)</sup>を参考にしながら考えてみよう。「United States」とある人が発話したとする。これは、一つの語句の発話というアクチュアル・エンティティである。全てを発話し終わるまでは、そのプロセスは、この語句の発話としては実在的潜勢態である。それで、時間的な拡がりも発話の完了までは現実態ではなく、実在的潜勢態である。アクチュアル・エンティティは、常に過去からの影響の受容によって生じ、来たるべきものの過去となる。この継起が時間の進行である。アクチュアル・エンティティは、これを受容する別のアクチュアルエンティティにおいて初めて過去という性格を付される。「United States」という発話は、「一つの語句として聞く」というアクチュアル・エンティティによってのみ、一つの過去として受容されるわけである。従って、別のアクチュアル・エンティティには、「United」という単位で受容されるかも知れないし、十二のシラブルとして十二のアクチュアル・エンティティに受容されるかも知れない。無生物には、空気の振動に他ならないであろう。ホワイトヘッドは、影響の授受によって時間の系列を考えている。これは、相対論に従っているのである。

ここで次のような疑問が生じるかも知れない。「United States」を一つの語句として聞いた

ものにも、やはり十二のシラブルが聞こえ、空気の振動が感じられたのではないか。この疑問は、先の説明の内に含まれていたパースペクティビズムを露にする。

例の語句の発話を私が聞いたとしよう。これは一つのアクチュアル・エンティティである。ところで、私の鼓膜の細胞は、空気の振動を受容したであろう。この活動も一つのアクチュアル・エンティティである。私は、細胞の集まりではない。細胞の活動は私の行為の下位システムである。私が発話を聞くという行為は、過去からの様々な影響（この中には、例の発話も過去の私も含まれる）を統一することである。その際、空気の振動が鼓膜細胞を刺激し、その刺激は次々と伝達され中枢に至る。この連鎖は、細胞レベルでは、過去から現在へという進行である。しかし私の行為全体にとっては、潜勢態である。私の行為全体は、この連鎖と他の様々な活動の統一である。鼓膜細胞の活動は、私の行為全体の過去ではない。私の行為は、この活動を含む全体であり、この活動の後におこるものではない。私の行為の中には、様々の細胞的活動や電子的活動が見い出されるであろう。これらの部分は、全体の過去ではない。また全体は、部分の集積ではない。全体は一つの統一活動である。この統一の完了時に、すなわち現実態において、「私は例の語句を聞く」のである。このアクチュアル・エンティティの中には、「United」や十二のシラブルを聞くという活動は現実態として見い出されることはない。

こうして、アクチュアル・エンティティは他のアクチュアル・エンティティを含み、また含まれ、あるいは重なりあうであろう。私の一つの行為は、様々のアクチュアル・エンティティを含み、それらは各々としては現実態であるが、私の行為全体にとっては潜勢態なのである。アクチュアル・エンティティは進展する宇宙のパースペクティブである<sup>(19)</sup>。これは、統一のあるいは関係づけのパースペクティブである。それ故、電磁的活動も細胞的活動も人間の行為もローマ帝国もアクチュアル・エンティティなのである。

## 目的因

アクチュアル・エンティティは、過去からの影響を統一する活動である。実在的潜性態を現実態へと統一するものである。この統一が進展であり新しさであった。現在は過去の集積ではなく、新しい統一である。

しかし、アクチュアル・エンティティが過去の単なる集積ではなく、統一であるというためには、統一の原理がなければならない。さもないと、集積と統一の区別がつかないであろう。そこでホワイトヘッドは、過去からの影響という結果因とともに統一の原理として目的因を認める<sup>(20)</sup>。過去から来たものが、結果因であり、これを統一する指標が目的因である。この両原因は、プロセスに内在する原因である。

目的因の内在とは、統一の目標が内在しているということである。プロセスとは目標に向っての進展である。しかしプロセスは結果因によっても支配される。両者の統合によって現実態に至るわけである。ホワイトヘッドが目的因を考えているのは、人間の行為をも自然の中に組み込もうとするためと、現在を過去からの飛躍を含んでいるものとして考えるためであろう<sup>(21)</sup>。

では、目標はどのように内在しているのか。それは、アクチュアル・エンティティを規定するものとして内在するフォームによってである。アクチュアル・エンティティはフォームによって規定されている。その結果因である実在的潜勢態も統一の方向を与える目的因もフォームにより規定されている。

すぐに気づくように、目的因のフォームは現実態を規定しない。プロセスが現実態に至れば、もはや、目的因は内在していない。こうして、フォームは、二通りの仕方で内在する。ホワイトヘッドは、これを、非制限的内在と制限的内在として区別する<sup>(22)</sup>。前者は、現実態を規定するものとしての内在であり、後者はそうではない場合の内在である。実在的潜勢態を規定しているフォームは、過去の現実態のフォームであり、非制限的に内在する。目的因のフォームは、プロセスの進展を規定するものとして制限的に内在する。現実態に至れば、目的因のフォームと類似したフォームが非制限的に内在するに至るわけである<sup>(23)</sup>。

目的因のフォームは、過去から由来したものであってはならない。さもないと、統一の仕方が新しいものではなくなる。そもそも統一とは呼べなくなるであろう。では、目的因のフォームはどこに由来するか。全ての実在をアクチュアル・エンティティと考える哲学では、答は、A) アクチュアル・エンティティからか、B) 無からか、のどちらかである。ホワイトヘッドの答は、Aである<sup>(24)</sup>。だが、このアクチュアル・エンティティは過去ではない。ましてや未だ実在していない未来ではない。ホワイトヘッドは、全てのフォームが内在するアクチュアル・エンティティを考えて、これを「神 (God)」と呼ぶ。神以外のアクチュアル・エンティティは神の影響として目的因を得る。

神は、アクチュアル・エンティティであるから他のアクチュアル・エンティティと影響の授受を行う。神は、「全ての形而上学的原理に対する例外として扱われてはならない<sup>(25)</sup>」のである。各々のアクチュアル・エンティティは目的因を神から受容する。神は、各々のアクチュアル・エンティティを拡散した形でなくそのまま、すなわち「進展する宇宙の現実態<sup>(26)</sup>」として受容する。神の目的因は全てのフォームであり、全ての可能性が神自身の内で実現し調和していることが神の目的である。神における統一は、宇宙の全ての現実態の統一である。宇宙は進展するから、神は宇宙における活動と「同調的に生成する<sup>(27)</sup>」のであり、神の活動は終了することがない<sup>(28)</sup>。神は、宇宙の全てのアクチュアル・エンティティに目的因を与えるから、最終的な根拠である<sup>(29)</sup>。また全てのフォームが神において秩序づけられているので宇宙の秩序の源であるとされる<sup>(30)</sup>。

この神は様々の解釈が可能であろう。最も自然主義的な解釈は、神を現実化した限りでの宇宙と考えるものであろう。神は、宇宙は進展して行き内在する可能性の全てが実現したわけではないということをホワイトヘッドの立場で抱えたものともいえよう。

しかし、どのような解釈においても神はある矛盾を抱えているように思える。宇宙の全てのアクチュアル・エンティティに影響を与えるのであるから、神は常に現実態と考えることができる。しかし神の目的は全て実現したわけではなく、神は宇宙とともに生成を続ける。生成を続けているものは、現実態に達したとはいえないであろう。では神は潜勢態か。しかし、その時には、統一活動の途中であり、ホワイトヘッド哲学では、他に影響を与えることができないはずである。そもそも、この時にはアクチュアルなものとはいえないであろう。こうして、神は現実態であり続けながら、生成を続けて行くものである。しかし、これは形而上学的原理に対する例外ではないか。端的なる矛盾ではないのか。

第二部において、この矛盾のよって来たる所を検討し、さらにこの矛盾の意味する所を示したい。

## 第二部 矛盾

神は現実態でありながら生成し続ける。これが神における矛盾である。生成し続けるということはま

だ目的因が働いているということである。要するに、現実態であることと目的因が働いていることが矛盾するわけである。現実態とは、アクチュアル・エンティティのプロセスの完了である。プロセスの完了までは、現実態ではない。目的因とは、プロセスを始めから支配するものでありプロセスが現実態に至った際には、働いてはいない。

もともとアクチュアル・エンティティは、二様の性格づけを有する。すなわち、目的因に支配された活動であり、活動の完了としての現実態である。しかし、この二つの性格が結びつくとは限らない。目的因による活動が完了するとは限らない。完了した活動が目的因によるものであったとは限らないであろう。さらに、二つの性格は共存を、同時的共存を許さないものである。従って、神において、この二つの性格が調和していないのはそれほど不思議な事ではない。むしろ神以外のアクチュアル・エンティティにおいて調和可能であるのは何故かが問われねばならない。

神以外のアクチュアル・エンティティにおいて二つの性格が相補的に結びついているのは、この活動が必ず完了するからである。それでアクチュアル・エンティティは、何らかの結果を目指す活動として、一個の活動として理解され得る。宇宙における活動が必ず完了するのは、有限な活動で達成可能な目的が神から由来するからである。宇宙の活動が、二つの性格を持つ一個の活動として理解され得るのは神が介在するからである。

神に有限な目的を供するアクチュアル・エンティティはない。神の目的は無限である。これが神における矛盾発生理由である。

では、何故、神の目的が無限となるのか。それは、いうまでもなく、全てのフォームが内在していなければならないからである。ホワイトヘッド哲学において、全てのフォームが神に内在していなければならないのは、神が新しさの源であるからである。

目的因はホワイトヘッドにおいては、本来、現在の新しさのために、現在が過去からの飛躍を含んでいるために導入されたものである。ある目的に支配された活動が新しいものを含んでいるとは限らない。宇宙の活動の目的因が全て同一であったならば、宇宙は新しいものを生まず、進展しない。それで、目的因のフォームは過去から由来したものであってはならなかったのである。それ故、神が考えられねばならない。また、神に内在するフォームは無限でなければならない。さもないと、いつか新しいフォームがなくなり、宇宙の進展は止まってしまうであろう。

こうして、ホワイトヘッド哲学の根源的矛盾は、「新しさ」の根拠づけから発生している。「新しさ」とは、非実体の立場に立つホワイトヘッド哲学が、是非とも認めねばならないものである。実体の哲学では、宇宙には本質的に「新しいもの」は無く、進展はない。認められる変化は、運動だけである。また、ホワイトヘッド哲学は、哲学である以上、新しさの根拠を示さなければならない。無から由来するというのは、ホワイトヘッドにとって、説明ではなく、釈明なのである<sup>(31)</sup>。

「新しさ」は偶然的なものであって、神を考える必要はないという考えもある。その偶然性の統計的法則を作ることもできよう。しかし偶然性とは、結局、結果から見て行くことである。結果の産出の根拠にまで理性がは入り込めないということである。従って、無根拠ということであり、無から由来するということと同じことになる。

ホワイトヘッドの神は、プラトンのイデア界を自然主義的に把まえようとしたものと考えられる。ホワイトヘッド哲学における矛盾の存在は、宇宙の創造性（新しさ）の根拠が真の超越にあること

とを示しているという見方もあり得よう。また、宇宙の進展は合理的理性の分析の及ばないものであるという考え方もあり得よう。

ホワイトヘッド哲学の困難は、現実態と目的因が整合的 (coherent) でないところに遠因がある。現実態とは、完成を意味する。現実態は、何かの完成であって、必ずしも目的の完成を意味しない。また目的因は完成を含意しない。実体の「運動」も完成に達し得るであろう。非実体の哲学にとっては、現実態よりも、新しさの根拠である目的因の方がより重要である。アクチュアル・エンティティの二つの性格は、整合的ではないから、同じ資格でホワイトヘッド哲学に存在するわけにはいかないものだったのである。「実在とは、プロセスである<sup>(32)</sup>」というホワイトヘッドの根本的モチーフからするなら、アクチュアル・エンティティは、まず、目的因に支配されたプロセスでなければならない。それが、完成態に達しようと達しまいと達しまいと、アクチュアル・エンティティでなければならない。現実態は本質的性格というよりも、附帯的性格と考えられねばならないのである。

だが、ホワイトヘッドのプロセスは、実在的潜勢態から現実態へのプロセスである。このことはどのように考えればよいのか。実在的潜勢態とは、未だ確定的でない活動、可変的活動である。それは、現実態に至って確定的な性格を持つ。しかしそれは、「実在的」と名づけられているように無ではない。実在しているものである。実在的潜勢態は、現実態にその存在を負ってはいない。現実態に達しなくとも、実在しているものである。元来、潜勢態は現実態の潜勢態であって、現実態が無ければ、潜勢態は無い。しかしホワイトヘッドは、「実在的」と名づけることによって、現実態に関わらず存在する可変的なものを賦めているのである。プロセスそのものは実在的潜勢態である。プロセスは、現実態に達しようと達しまいと実在なのである。

こうして、現実態を付帯的なものと考えてもホワイトヘッド哲学は成立し得ると思われる。プロセスは、現実態に達すると終了するが、現実態とは完成なのであるから当然のことである。現実態に達しないプロセスを考えても、ホワイトヘッド哲学は何ら困らないと思われる。プロセスは、何よりもまず、進展であって、どこかへの過程とは限らない。そもそも、「実在的」潜勢態という表現は、ホワイトヘッド哲学が、現実と潜勢という図式に必ずしもうまく合致しないことの証拠である。現実と潜勢は、ホワイトヘッドにおいては、むしろ単に確定と不確定とすべきものである<sup>(33)</sup>。

そこで、次のように考えるなら、神における矛盾は解消されるのではないだろうか。アクチュアル・エンティティのプロセスは完了するものもあれば、しないものもある。宇宙におけるプロセスは、目的の有限性の故に完了する。神は、目的の無限性の故に完了しない。確定的な性格を持つアクチュアル・エンティティは他に享受される。宇宙におけるプロセスは、完了とともに確定的となる。それで、消滅して他のものに享受される。神は消滅せず、常に確定的である。神は全てのフォームを含み、宇宙の確定的なものをそのまま受容するから、常に確定的である。それ故、神は常に他のアクチュアル・エンティティに享受される。こう考えるなら、ホワイトヘッド哲学は、整合的なものとなる。

#### ( 注 釈 )

##### 略 号 表

AI Adventures of Ideas. New York: Free Press 1967

FR The Function of Reason. Boston: Beacon Press 1967

MT Modes of Thought. New York: Free Press 1968  
 PR Process and Reality. Corrected Edition, Edited by David  
 Ray Griffin and Donald W. Sherburne. New York: Free Press  
 1978  
 S Symbolism: Its Meaning and Effect. Cambridge: 1958  
 SMW Science and the Modern World. New York: Free Press 1967

- (1) Wallack, F. Bradford The Epochal Nature of Process in Wh-  
 itehcads Metaphysics. New York: 1980
- (2) PR 3-4. Cf. AI 190, MT 150, 171.
- (3) SMW 144 (デカルト「哲学原理」第一部第五十一節). Cf. PR 136, AI 205.
- (4) Gerhardt版VOLVI 401.
- (5) SMW 49-50, 58, 91.
- (6) SMW 50.
- (7) PR 22. Cf. SMW 123.
- (8) SMW 152.
- (9) PR 91-92.
- (10) Ibid.
- (11) PR 20-22, 75. Cf. Wallack, op. cit., 37-40.
- (12) PR 229. Cf. Wallack, op. cit., 15-17, 180-181.
- (13) PR 99-100.
- (14) PR 29, 210. Cf. AI 237-238.
- (15) PR 137.
- (16) PR 68-69, SMW 125-126. Cf. S 35.
- (17) AI 181-183.
- (18) Wallack, op. cit., 178-180.
- (19) PR 210, 236. Cf. SMW 70.
- (20) PR 277. Cf. PR 102, FR 26.
- (21) 量子論に合致するためでもある。
- (22) PR 291.
- (23) 結果因も働くので、目的のフォームはある程度の変容を受けて実現する。Cf. PR 224.
- (24) PR 46, 67.
- (25) PR 343.
- (26) PR 88.
- (27) PR 345.
- (28) PR 347.
- (29) PR 108.

(30) PR 88, 108, 347.

(31) PR 145.

(32) SMW 72.

(33) Cf. PR 43.

[ 哲学 博士課程3回生 ]

Secondly, an attempt at proper reconstruction of the argument in the Second Analogy is made. Its starting premise, which is a result of the Transcendental Deduction, is that it is possible to determine empirically objective temporal relations of phenomena. But it depends heavily upon some further presuppositions, 1) those concerning the nature of our 'perceptions' and 2) those concerning the notion of 'cause' or 'causality'. To begin with, by 1), Kant denies the perceptibility of temporal relations between any two phenomena either vis-à-vis the absolute time or vis-à-vis one another. This means that no successive sequence of perceptual representations, however long, could provide us with any information about objective temporal relations among phenomena. It follows from this that whenever an objective succession of phenomena is experienced (i.e. the objective temporal relation between them is empirically determined as successive), some (particular inferential) rule concerning their time-relation must be presupposed to obtain in that situation. Then, from this, Kant infers that such a rule must be a particular causal law, according to 2): i.e. that every non-logical necessary connection is a causal one, that cause cannot be preceded by effect and that causal relation is asymmetrical. As a result of this reconstruction, it is shown that Kant's argument is logically sound, if only those presuppositions mentioned above be accepted.

Thirdly, some important implications of the argument of the Second Analogy are pointed out. The first point is that this argument shows nothing about cognizability of those particular causal laws presupposed to obtain in the objects themselves. That is, the objective validity of the general principle of causality does not imply at all that there is any amount of regularity or order shown in nature. The second point is that the Second Analogy establishes that the principle of causality is one of those formal principles belonging to the judging subject alone (i.e. 'thrown in' or 'imposed' *a priori* by this subject). This is obvious from the place of the Analogies in the Transcendental Analytic explained above.

(Because of lack of space, I should like to discuss on another occasion whether and why those presuppositions of Kant's argument pointed out above are unacceptable.)

### **Modes and a Paradox of Actual Entity**

*by Koichi Takeda*

Many people have considered Whitehead's metaphysics as difficult and paradoxical. Recently, Wallack showed that many paradoxical expressions in Whitehead's metaphysics were not genuine contradictions but knowable.

I think, however, Whitehead's metaphysics still has a contradiction. It arises from incoherence between actuality and final cause in actual entity. Actuality is the completeness of a process of actual entity. Final cause is the controller of a process of actual entity. However, a process con-

trolled by final cause is not necessarily accomplished and an accomplished process is not necessarily controlled by final cause. In universe, actuality and final cause are harmonized by intervention of God, who is also an actual entity. But, in God, they are harmonized by nothing, so a contradiction occurs. The contradiction is incompatibility between God as actuality and God as process by final cause. Because aim and process are infinite, God's process cannot be complete.

To resolve this contradiction, we should regard his actuality as decisiveness, not as completeness. In doing so, we will be able to resolve the contradiction and Whitehead's metaphysics will be coherent.